



息子の面影

2020年/メキシコ・スペイン映画
配給：イオンエンターテイメント/99分

2022（令和4）年5月30日鑑賞

シネ・リープル梅田

監督：フェルナンダ・バラデス
脚本：アストリッド・ロンデロ／フェルナンダ・バラデス
出演：メルセデス・エルナンデス／ダビッド・イジェスカス／フアン・ヘスス・パレラ

👁️👁️ みどころ

アメリカとメキシコの国境といえば、古くは、ジョン・ウェイン主演の『アラモ』（60年）で、トランプ大統領の登場以降は“壁建設”で有名になったが、「悪魔が潜むメキシコ国境。行方不明の息子を探す母の旅路」を描いたのが本作だ。

“何でも説明調”の邦画と正反対の本作は、ストーリーの把握が難しい。息子は生きてるの？あの惨殺シーンは一体ナニ？あの真っ赤な炎は？

終始ワケのわからない映画だが、音楽と風景を含め、雰囲気だけはタツプリと・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆『息子の面影』と題された本作はメキシコ・スペイン映画。2020年サンダンス国際映画祭で観客賞と審査員特別賞をダブル受賞するなど、本作は世界的に高い評価を受けているらしい。そのテーマは、「悪魔が潜むメキシコ国境。行方不明の息子を探す母の旅路」というものだ。

メキシコ国境といえば、古くはジョン・ウェイン主演の『アラモ』（60年）で有名だったが、近時は2017年11月の大統領選挙でのトランプ候補の勝利以降は、“壁建設”で大問題になった。しかし、本作はどんな問題提起を？

◆近時の邦画は、明るい色彩、はっきりトーンのうえ、“何でも説明調”が顕著。これならポップコーンを片手に隣席の彼女と時々顔を見合わせながら、美男美女が登場するスクリーンを見ていると十分理解可能。そして、終わってみれば必ずハッピーエンドだから、よしよし・・・。

ところが、本作はそれとは正反対で、冒頭から暗いトーンのスクリーン上に、アメリカで消息を絶った一人息子を探すべく、1人で村を出発する女性マグダレーナ（メルセデス・エルナンデス）の姿が登場する。彼女はある村へ向かう道中で息子と同じような年齢の青

年ミゲル（ダビッド・イジェスカス）と出会い、彼が母親を探していることを知ると、そこから2人は息子と母それぞれの大切な存在を求めて旅を始めることに。

◆マグダレーナの息子の名前はへヘス（フアン・ヘスス・バレラ）。彼は、「リゴと行くよ。アリゾナで仕事をする。」と言い残して母親の元を離れたが、今その息子はリゴと共に行方不明だ。そして、連邦警察から送られてきた写真を確認すると、そこにはリゴの写真が。へヘスの写真がなかったのは幸いだが、彼は今生きているの？

◆本作のストーリーはそんな（単純な）ものだが、説明が全くされない本作では、そんなストーリーが容易に掴めない。そのうえ、なぜ眼科の女医が登場してくるの？また、多数のメキシコ人が惨殺されたという現場には火が放たれたそうだが、スクリーン上ではメラメラと燃え上がるその炎が印象的。これぞまさに悪魔の生贄？すると、メキシコ国境にはホントに悪魔が潜んでいるの？いやいや21世紀の今、そんなことはあり得ないが、本作を観ていると、さもありなん・・・。

◆映画と音楽は切っても切れない仲。永遠に愛される名作は永遠に愛される名音楽と共に生き続けるものだが、その大半はモーツァルトの音楽と同じように、美しいメロディーが印象的なものだ。それに対して、本作の音楽は終始不穏なリズムを刻むもので、ある意味“耳障り”だが、それでもやっぱり印象的。また、何よりも素晴らしいのは、終始暗いトーンの中で幻想的に映し出されるメキシコの荒野だ。

ラストに近づくにつれて、へヘスの命はすでになくなっていることが再三予告されるが、それでもマグダレーナは・・・？終始ワケのわからない映画だが、雰囲気だけはたっぷり味わうことができるので、この手の映画が大好きな人は是非・・・。

2022（令和4）年6月3日記